

昔話伝承における会話表現の働き

黄地 百合子

はじめに

様々な昔話集を繙き、時にはその語りに耳を傾けていると、一般に「良い語り手」とされる方の語る昔話では、「会話部分（せりふ）」が多いことに気づかされる。さらに、登場人物の独り言や心の中で思っていることを直接話法的に表したものも含めると、「会話表現の部分」⁽¹⁾の頻度は非常に高くなる。それに対して伝説や世間話は、同じ口承文芸であり昔話と共に「民話」として総称されることもよくあるが、会話部分は比較的少ない。また、周知のように、昔話の語りにおいては登場人物の人物や感情・心理等の内面が「地」の部分で説明されることは少なく、会話や行為を通して暗に示されることが多いと思われる。それらを考えあわせると、会話表現は伝説や世間話に比して昔話において特徴的で、かつ昔話の表現全体の中で重要な役割を担っているのではないかと推測されるのである。

そこで本稿では、昔話の中の会話表現（せりふ）に関して、

それが個々の語りの中で果たす役割と、語り手から聞き手へと伝承される際に果たす役割という、二つの観点からの考察を試みたいと考える。

会話表現と登場人物の内面

まず、本格昔話において会話表現が登場人物の内面を如実に表しているものとして、鳥取県東伯町の山下寿子さんの「馬子と山ん婆」⁽³⁾を例に挙げてみたい。山下さんの語りは非常に会話部分が多く、しかも臨場感あふれる会話のやりとりは聞く者をたちまち語りの世界に引き込んでしまう。その話は次のように語り出される。

馬子が、作州の人形仙に、チリンチリンといって鈴を鳴らして、上がりよりましたら、山ん婆が出てきて、「馬子殿、馬子殿、その鯖あ一さし嘗めさせっされの」「こりや、我

や鯖だないわ。津山の殿さんに持って行かにやあならん鯖だ」「そがんこと言わずに、一さし嘗めさせつされの」「そらつ」って一さし抜いて投げてやったら、すぐにケソツケソツと嘗めてしまつて、「馬子殿、馬子殿、もう一さし嘗めさせつされのう」「そがいにわれへやつてしまやあ、殿さんに持って行く鯖、無うなつてしまふわい、やられぬわい」「そぎやんなこと言わんはつと、こなさんも馬もみんな囓んでしまつて進ぜるぞ」。

右の傍線部は馬子の言葉で波線部は山ん婆の言葉であるが、馬子がいくら拒否しても山ん婆がしつこく要求を続け、徐々にその恐ろしさがエスカレートしていく様は、この会話によつてみごとに表現されている。またこの後の話の中盤、その恐ろしい山ん婆が、馬子から鯖や馬を強奪した後自分の住処に戻り、馬子が隠れているとも知らずリラックスして隙だらけの姿をさらす様子は、次のように山ん婆の独り言（傍線部）として語られている。

「ああ、腹太や喉乾きや。馬あ一匹囓み、鯖あ一駄だんなあ、ついでのことにあの馬子めも囓んでしまつたらあ良かったに。ああ腹太や喉乾きや。茶など沸かきやあて飲まあかい。」
囀ゆゑ裏に火い焚きつけて、お茶、コトコトコトコト沸かいて、「ああ、茶がよう沸いた。茶口に餅なと焼いて食わあかい」。餅取りい行つて、餅あぶつて、プウーツと餅がふ

くれて、「ああ、餅が焼けた。醤油う取つてきて、醤油つけて食わあかい」。醤油取り立つた間に、馬子が屋根裏の竹抜いて、ちよいとその、餅を取つてしまつた。

その後結局馬子に殺されてしまふまで、最初の恐ろしさとは打つて変わつて全く警戒心をなくした山ん婆の様子は、（引用は省略させていただくが）引き続き独り言を通して語られるのである。

さて、次の鈴木サツさんの「お月お星」においても、同様のことを確認できる。鈴木サツさんは遠野の語り手としてよく知られた方であるが、その語り口は山下さんに比べると淡々としていて奥に秘めたものを感じさせられる。次は「お月お星」の冒頭の部分である。

むかす、あつたずもな。

あるとこに、お月にお星つて、とつても仲のいい姉妹きょうだい同士あつたつたずもな。お月の方ほ先せんの母がの子で、お星の方ほアわれの子で、どれえも美すかつたずもな。

いっつもその母が、朝間早あさまあく起きて、囀しほ裏と火焚しいてえて、そしてあつてれからに、「お月、お星、起きろいえー」つて、そういえば、「はあい」つて、二人、つおろつ、つおろつと起きてきたずもな。その後家母が、それ見て、「お月も美すす、お星も美すす、お月せこけ（さえ）なかつたら、このお星、なんぼめぐくす（かわいがる）にかんべ」と思つたずもな。

当初お月もお星もほぼ同じように可愛がついていながら、ある時実子のお星可愛さの余り、継子のお月を亡きものにしようと考える継母の心の変化が、傍線部のように直接話法的な言葉で語られる。そして、その母の企みを知った後のお星の考えは、次のような会話（波線部）によって表されている。

そしてば、お星ア、「姉っこ、姉っこ。今夜、お母のけるまんじゅう、食うなよ」って言つたずもな。「おれ、けつから、おれのまんじゅう食えよ」って。そして、その母のこさえた毒まんじゅう、食せぬずもな。

そんなでも、次の朝間の、朝んなれば、後家母のことにせばハ、「お月ア」死んですまつたもんだと思つて、いつものよに囲炉裏さ火焚えて、そして、知あねえふりして、「お月、お星、起きろいえー」つてば、「はあい」つて、また二人つおろつ、つおろつと起きてきたずもな。その後家母、「ああ、この童子アなんぼすたつて、毒まんじゅう食せてもわがんねが（だめだな）」と思つたずもな。

右の傍線部はやはり継母の心の声で、その後継母の企ては手段を変えて繰り返されることとなる。一方、お星がお月を助ける方法を話す言葉も繰り返されるが、お月をかばうお星の純粋な優しさ賢明さが地の部分において説明的な言葉で述べられることは

なく、主に会話表現とお星の行動を通して描かれているのである。また、動物昔話においてもテンポの良い会話表現が見られることが多い。その一つとして、石川県山中町の元谷藤子さんの「雀の仇討ち」の冒頭部分を例に挙げよう。

ある所に、雀と、雀がね、田んぼつくつたんやといね。ほして、まあ一所懸命に、雀あ田んぼつくつて、ほしてえいいのになつたんやといね。ほして、いまだ刈んに行けるかなあとと思つて刈んに行つたら、ほた猿があ、あのう、雀が刈ると思つたら、「ああ、ええのになつたなあ」ちゅうて、ほのう、「ひとつくれ」ちゅうたんやて。「つらたつう」つたんやといね。ほうしたら、「はあ、恐ろしや、恐ろしや」ちゅうて、まあ一穂やつたんやて。ほいつたら、雀あ、まあ、また一所懸命でこうして刈つとつたらしいんや。ほしたら、今度猿はまた、「もう一穂くれ」ちゅうたといね。「まあ、親にも子にも見せん先にい」つた。また、「つらたつう」つたとい。「はああ、恐ろしや」ちゅうて、また一つやる。

傍線を付した所は猿の言葉で波線部は雀の言葉だが、真面目で気の弱い雀と横暴な猿の対照的なキャラクターが、その会話によって如実に表されていると言える。「つらたつう」とはこの地方の方言で「腹の立つ」という意味だが、この言葉を聞くや雀は「はあ、恐ろしや」と言つて猿の言いなりになってしまう。

「つらたつう」が会話の中で相手を言い負かす決定的な言葉であると思われるやとりであり、会話表現でなくては表現しきれない雰囲気を感じ取れる場面なのである。

次いで、同じ石川県山中町の中島スギさんの「牡丹餅は化物」の語りを例に、笑話における会話表現を見てみよう。中島さんの語り方は他の話では概して穏やかでゆったりとした感じなのだが、この愚か智型の話は話すうちに自分でも笑いがこみ上げてきたのか、後半は半分笑いながら軽やかに語られている。次は、その前半部分である。

むかし、だらな聾さんがあつたんやて。ほたら、親の家へ遊びに行つたんやて。ほつたら、親の家にや、「長いこつて来たんにやに、牡丹餅でもして食べさしよか」て言うたんやて。ほしたらその子どん共が、せん先から取つて食べよつていうさかい、「あつぽが食い付く」つて親たちや言うたんやて。そしたら、「あつぽあ食い付くさかい、僕はもう食わん」て、そう言うたんじやつて。(中略)

「お前食わんしい、このあつぽをほんなら家持つてつて嫁さんにやつてくれ」ちゅうて、その婆、包んでくれたんやつて。たら、「あつぽが食い付くさかえ、この杖の先に括つてくれにや担ねて行けん」て言う。(中略)

道にけっこうな江川みたいな川があつたんやつて。そこを、「やあとこせつ」とまたいだんやて。そしたらその杖

に括つてあつたのがやわんこなつたんか、どんなんや知らんけど、ずるずるとずつてきたんやつて。「ああ、さあさ、あつぽが食い付く」つてそこにほつかつて家帰つたんやつて。

傍線部が聾の言葉で、「あつぽ」を牡丹餅のことと知らず、子どもをおどすために大人(親)が言った言葉を勘違いし、「あつぽ」に食い付かれては困ると怖がる聾(息子)が描かれているが、その愚かぶりが聞く者の笑いを誘うのは、絶妙な会話ゆえである。この話は引用部分の後も地の部分での説明は実に簡潔で、だらな聾の思い違いとその微笑ましい人柄が会話表現によって余す所なく語られる。

会話表現と具体的イメージ

さて、以上四例を見てきたにすぎないが、伝統的な伝承の語りの場合、聞き手が「良い語り」だと感じる話であれば、これら四例のようなことは決して珍しくはないだろう。一方、会話が少ない語りは粗筋を話すような印象のものとなり、多くは「良い語り」とは思えないものである。つまり、会話表現(直接話法の独り言や心の声も含む)によって、聞き手は登場人物の人柄・心理・感情などの内面を理解し、説明的な言葉は無くとも具体的なイメージを抱くことができるということになる。

さらに、内面ばかりでなく時には登場人物の行動も会話表現で示される。例えば、「馬子と山ん婆」における馬子に向けた山ん婆の言葉と後半の山ん婆の独り言、「お月お星」における継母の心の声は、自らの次の行動を言葉にしているものである。また、お星がお月に話す言葉によって、聞き手は二人の行動を知るができる。牡丹餅を怖がる「愚か舛」の行動も、その子どもっぽい言葉遣いを通して目に見えるように想像される。

そしてもちろん登場人物間の関係は、両者の間で交わされる会話によって明らかになってくる。日常生活の中でも、会話の内容が会話をかわす者たちの関係の在り様を示すことは、誰もが経験していることだが、先に例に挙げた話の中の登場人物――馬子と山ん婆、お月とお星、雀と猿等の関係も、会話によってリアルに理解できるといふことは明白であろう。

ところで、このように昔話のストーリー展開にとって重要な様々な事柄を、聞き手に対して具体的にわかりやすく示すのが会話表現の役割だとすれば、実はそれは昔話が語られてきた環境を考慮すれば必然的なものであるのかも知れない。

なぜなら、昔話の主な聞き手である子供達は、まだ文字を自由に読み書きできないことが多く、たとえある程度文字を読み書きできても、書かれた文章に十分慣れているとは言えない小学校低学年くらいまでの年齢であるからだ。そういう聞き手にとって「言葉」とはイコール「日常の話し言葉」、つまり「会話の言葉」であり、さらに言えば「方言」・「母語」であり、「声

としての言葉」でもあろう。そんな聞き手たちは、本来文章語である抽象的、概念的な言葉を使った説明によって具体的なイメージを想像することは困難であると考えられる。彼らは、ふだん自分たちが話したり聞いたりする方言（生活言語）の会話表現によって、話の登場人物の内面や人柄、また行動や人間関係等その人物に関わる話の内容のあれこれを具体的にイメージし、話に入り込み話を楽しむことができるのだ。

しかもかつては、大人の多くも、読み書きができないか十分慣れてはいなかったと思われ、聞き手たちだけでなく語り手自身も、抽象的・概念的な言葉を使いこなせるということは少なかったと考えられる。（ずっと以前、大人も聞き手であった時代に、同じ事情が存在したことは想像に難くない。）だから語り手は、声の言葉である方言と文字になったら消えてしまう声の表情によって会話表現を豊かに彩り、時には顔の表情や手の動きも加えて、語り手と聞き手の双方にとっての具体的なイメージを語ったのである。

今回例にあげた四人の語り手の話については全て音声資料によって元の語りそのものを確認した。映像はないため顔の表情などは確かめられなかったものの、いずれも声の表現力が豊かで、特に会話部分では登場人物に次々と変身してゆかれる様か聞いていてよくわかる。そして、会話部分（せりふ）は語り手にとって語りの表現力（声の表現力）を存分に発揮できる場面であるという印象を、一層強くしたのである。

母から娘に伝えられた昔話の会話表現

さて、このように、昔話が語られる際に、語り手は会話部分で語りの表現力を発揮し、聞き手は会話部分を通して具体的なイメージを膨らましていくのだとすれば、昔話が語り手から聞き手へと受け継がれ、聞き手がやがて語り手へと成長する過程、つまり伝承そのものにとつて、会話表現部分が何らかの働きをしているのではないかと想像できる。

そこで、伝承に関わつての会話部分の働きについて考えるヒントを与えてくれる一つの例を取り上げてみたい。それは、奈良県の語り手・松本イエから、その娘・松本智恵子へと伝承された「ヒチコとハチコの伊勢参り」という話である。ちなみに、イエは筆者の母方の祖母で、智恵子は筆者の母である。私は、

祖母と母の二人から昔話を聞いた経験を持つが、幼い頃祖母に聞いた数々の話の中で「ヒチコとハチコの伊勢参り」は最も好きな話の一つであった。

後に示したのは、昭和四〇年に『近畿民俗』第三十六号に紹介された^①イエの話と、筆者が採録した智恵子の話の二回分の語り（五十六歳時のものと七十九歳時のもの）を三段に分けて対照したものである。ただ、イエの話は当初テープに録音されたのだが、『近畿民俗』に発表された際に会話以外の部分が共通語になつている。また、智恵子の話は、中盤にイエの話と少し順序の違うところがある。しかし基本的に二人の話のストーリーはほぼ同じと言える。そして、智恵子の方が表現が詳しく全体として長い。特に七十九歳時の語りは長く、対照する際に複雑になるため、やむを得ず後半の一部分を省略した。

「ヒチコとハチコの伊勢参り」対照資料

語り手・松本イエ

(昭和三十九年採録・採録当時六四歳)

昔あるところに空をとぶことができるヒチコとハチコという二人づれがいました。
 「^①一べん伊勢まいりしようやないか」と相談して

語り手・松本智恵子

(昭和五二年採録・採録当時五六歳)

むかしむかしな、ヒチコとハチコとな二人がおつてな、空を飛ぶことができたんやで。で、ある日一な
 「伊勢参りしようか、^①一べん伊勢参り

語り手・松本智恵子

(平成十二年採録・採録当時七九歳)

むかし、むかしなあ、あるところに、ヒチコとハチコという青年が住んじやあつたんやと。ほんで、二人ともな、あつち行て遊んだり、こつち行て遊んだり、

「*^②ゴフク屋ノカドヘト、ヘチャラカチャ
ンノオドルイノルイ」

といつて呉服屋の前へおりたちました。

「^③一番上等の着物と羽織とじゅばんに
ばつち、^④はぶたえのへこおびからたびま
で、二通りそろえてだしとくなはれ」

と注文しました。呉服屋の亭主は、よい
お客さんがついたものやと思つて、

「ハイハイよろしやはす」

といつてさつそくそろえてくれました。

二人はさつそくそれを着て、

「どうだすよろしやはつかヨウニツキマツ
カ…」

といつてから

「アーエライコッチャ、^⑤シヨンベンしと
なりましたがな、^⑥はばかりおしえておく
んなはれ」

しようやんか」

そう言うてな、相談とまつてんけども、
二人とも汚い着物着て、これではみつとも
ないよつてん、どうしようかあ言うて、^⑬一、
二の三で飛びよつてんて。ほんで一番初
めやつぱり着物買わなんよつて、

「^②呉服屋の門へと、ほちゃらかちゃん
のおどるいのるい」

呉服屋の門へぼつと降りよつてんて。

「こんにちはー」

「はいはい」

「^③一番上等の着物と羽織と、^④へこ帯と、
足袋までそろえて、二人分出しとくなはれ
なあ」

そう言うて入りよつてんて。そんでに、
ええお客さん付いたと思つて、呉服屋の亭主
は奥から着物と羽織と、へこ帯もそろえて、
足袋もそろえて、出してきやつてんて。

「ちよつと着てみまっさあ」

言うて、二人が着物と羽織と着て、へこ
帯締めてほいて、あの、足袋もほいてから、

「ああ、あああ、^⑤小便しとなつた、小便
しとなつた」

言おつてんて。ほんでに

「^⑥はばかり、どこだつと」

「まあ毎日毎日こんなん、ぶらぶらして
んので、^①いつべん伊勢参りしーたいなあ」
ヒチコが言うたら、ハチコも

「うん、そうや、いつべん伊勢参り行こか
あ」言うて。

二人とも、空飛ぶことができたんやて。
ほんでに、

「せやけど、こんな風してみつとみないし、
お伊勢参りすんねやつたら、もうちよつと
ましな風せんなあかん」。ほんだら、

「そうやなー」^②「一番初めどうしよー」言うて
え、

「^②呉服屋の門へと、ほちゃらかちゃんの
おどるいのるい」て、二人が言うて、ぼーつ
と飛び上がったら、ひとりでにフーワフー
ワフーワと、飛べたんやて。ほて、呉服屋
の門へ、店先い、ちよんと降りよつたらし
いわ。そうして、

「こんにちはー」言うて入つてえ、

「ああ、なんかご用事でつかー」言うて番
頭はん出てきやあつて、

「ふーん、ええ着物ー欲しねんけどなー、
帯、あの三尺帯も欲しなあ、ほんでまあ、

^③一緒に羽織とお着物とお三尺帯とお、ほ
いて兵児帯か、^④兵児帯まで揃えて出して

といてシコをふむので二人を便所へ案内しました。

なんぼたつても二人がもどつてこないの
で、呉服屋の主人が見に行くともう便所に
はだれもいません。「エライコッチャ」といっ
てそこらたしをさがすと二人は空をとんで
いきました。

〔7〕アノーオ客サン、今の呉服代^⑧とこ
ぎり高いのに、はよはろとくなはれんか
と大声でさげふと

〔*9〕アトハシリクライカンノンヤ、ポー
といいながら飛んで行ってしまいました。
主人はどもしゃない、ヌスツトにでもおう

言おつたよつてん、

「あ、ちよつとそこ出で、裏へ回つた、そ
こだんね」

言うて番頭はんが案内しゃあてんで。ほ
いたら二人がそつちの方へたあーと小便し
に行つきような格好して行て、ほんで番頭
はんがもうあつちへ去んでしまやつたの見
計ろうて、

「もうこの辺でええなあ」

言うて、「^⑩一、二の三」で飛つぽつてんで。
ほいて、しばらくしても帰つてきやらんよつ
てに、呉服屋の大将が「ちよつと見て来い」
言うて番頭はんに見んにやらしやつてんで。
ほいたらもう便所にみたいな二人ともおら
へんで、ほいて、ちよつと上向きやつたら
空の上、着物と羽織と新しの着て、飛んど
んねて。

〔7〕おーい、お客さん、その着物と羽織と、
一番上等のだつせ、^⑧高い高いのだつせえ。
早払とくなはれやー」て言うて、番頭はん
が一生懸命に言やつてんで。ところが、二
人は

〔9〕あとは尻くらい観音やあー」

つて飛んでいつてんで。

「うまいこといたなあ。今度は、下駄買わ

んかー」こう言うて、ほんだら番頭はんは、
みつとみなあい体、あの着物着て、こんな
人なあて思ててんけど、あのーそういう風
に二人が揃うて

「二つずつ、二人やさかいに、二枚ずつま
ありしてやー」て言うて、奥い入つて、着
物出してきやる間あるよつてん、ほんで、
その辺まあ色々見てやつたらしいわ。ほい
でー今度めー、着物と羽織と兵児帯とー持っ
て来て、ちゃんとしやつたら、

「そうだんなあ、ええのやなあ、やつぱりー
さらのはええわ。いっぺん着てみよか」

「うん、いっぺん着てみなはれ」言うて、
着せやつてんと。ほんだら、ちゃんと足袋
もはかしてしやつた時に、

「あああ、ちよつとう^⑤小便しとなりまし
たー」言うて、

「どこに、廁ありまつとー」言うて、「お
手水行かしくなはれ」て、二人が言うも
んやから、あの、そこ、昔やつたら、やつ
ぱりー、外に皆、あの便所がこしらえたつ
たで、

「ちよつとそこ出で横向いたら向こうにあ
りまつしやろ」言うて、

「ああすんまへんや、あこへちよつと行

たと思つてあきらめました。

しばらくいって、こんどは

「*^⑩ゲタ屋ノカドヘト、ヘチャラカチャ
ンノオドルイノルイ」

といつて下駄屋の門口へおりたちました。
そして

「^⑪一番上等のキリゲタニ足だしてんか」
といつて下駄をはいて見て、また

「^⑫アーシヨンベンしとなつた、はばかり
おせてんか」といいますので下駄屋の主人
が案内しますと

「^⑬一、二の三」
で飛びたちました。

気がついて主人が、

「^⑭タカイ下駄ヤノニ、ハヨ、ハロトクナ
レ」

んなあかん、こんな草鞋ではあかんよつて
に」言うて、

「^⑯下駄屋のー門へと、ほちゃらかちゃん
のおどるいのるい」

で、下駄屋の門へ降りよつてんで。

「^⑰こんにはー、桐の、^⑱桐下駄の一番上
等の二足出しとくはなれなあー」

ほんで、下駄屋の大将が、ええ着物着た
お客さんやさかいに、とびきり上等の桐下
駄ニ足出してきやつてんで。ほんでえ、そ
こでヒチコとハチコがまたその桐下駄履い
て、「履いてみまっさ」言うて、履いてみて
から、また、

「^⑲あー、小便しとなりましたわ。はばか
りどこだつと」

で言うて、ほいて

「そこ出て右い曲がつて、裏のその辺へ行
とくはなはつたらわかります」

ちゆうて大将言うてあんのを、「はいはい」
言うて裏行つきよな格好して、おしっこ行
くような格好して、裏行て、しばらくくし
たら、また「^⑳一、二の三」て、飛びほつて
んで。ほれ、大将が、下駄屋の大将がなか
なか帰つてきよらんよつて、またこれも案
じて、はばかり見に行かはつたら、もうそ

て来まっさー」て言うて、ほてーその外の
厠へ小便しに行くような格好して、

「もう、この辺でええやろかのー」二人が
そう言うて、

「今度はどこにしよう」言うて、

「うーん、こんなん、足袋まではいたけど
下駄があらへん。じょうり、草鞋ではなあ。

^⑳下駄屋の門へとほちゃらかちゃんのおど
るいのるい」言うて、びあーとまた、手え
上げよつたら、二人とも着物着たままで、
ふわあーふわあーと上へ上つて行つこつて
んど。

ほんでに、番頭はんが「ちよつとおしつ
こて言うて小便て言うて行て、えらい遅い
なあ」と思て、ほてー便所の方へ行て、見
てみやつたら、もう上の方、ふあーと飛ん
どんねと。ほんでえ

「^㉑あの、お客さん、ああ着物も羽織も
なあ、あの兵児帯も、なあ、足袋まで揃え
て、^㉒いつ払てくだはるかなー、どつきり
お金かかったんのにー」ていうて言やつて
んでー。ほたら、

「^㉓あとは尻くらい観音やー」ちゆうて、
ふあーふあーと飛んで行つきよつたんやて。
ほんで、

と、どやぎましたが

「^⑨アトはシリクライカンノンヤ、ポー」といって飛んでいってしまいました。

こんどは「^⑩ポーシヤのカドへとヘチャラカチャンのオドルイノルイ」といっておりました。

「一番上等のボウシを出してんか」といってシャツポンをかぶってから、また

「^⑪シヨンベンシトナリマシテン、ハバカリオセトクナハレ」といって便所へ案内してもらいました。亭主があちへ行ってから

「^⑫一、二の三」で飛びたちました。ぼうし屋の主人がやいやいやいっている

「^⑬アトハシリクライカンノンヤ」といってしまいました。

んな便所みたいな誰もおらへんで、上見やあつたら、びやーあと飛んどんねて。

「おーい、お客さん、^⑭はよー、その桐下駄高いの、私とくなはれやー、そんなあ履いて逃げてもうたら困りまつせー」

て言うて、言やつたら

「^⑮あとは尻くらい観音や、ぼー」

「今度は帽子、買わなあかん。中折れ帽子のええの、ええしやっぽん出してくなはれな、中折れ帽子の、ええしやっぽん出してくなはれな、二人分だつせえ」

「^⑯帽子屋のー門へと、ほちやらかちゃんのおどるいのるい」

て降りよつてんで。ほて

「ええしやっぽん出してくなはれな、中折れ帽子の、ええしやっぽん出してくなはれな、二人分だつせえ」

て言うて、帽子出してもうて、ちよんとその帽子着て、

「^⑰あー、小便しとなりましたわ。ちよつとはばかり教とくなはらんか」

言うて、ほてまた、おしっこに行つきよな格好して、ほてまた裏からぼーと飛んで行っこつてんで。

あーこれで頭の中から足の先まで新になったよつてえ、もうお伊勢はん行こやな

「^⑱下駄屋の門へとほちやらかちゃんのおどるいのるい」て、また下駄屋の門へぼつと降りよつたんやと。ほた、

「^⑲こんにちはー」ちゆうて入って、

「ああ、お客さんや、お客さんや」言うて、下駄屋の大将が主人が出て来て、「何かご用事でつか」

「うーん、ええ着物買うてんけどな、あのー^⑳桐の下駄二つ出してんか。それ履かんと似合わんしな」言うて。ほんでー見れば、

着物も羽織も立派な着てあるよつてん、まあ、立派な桐の下駄、奥い入つてみつくろ

うてきてやる間に、また

「^㉑ああちよつと小便しとなりましたよつてんなー」言うて、ほて、裏の小便、便所へ行って、

「^㉒一、二の三」ちゆてまた飛び上がったよつてんと。ほてふあー、ふあーと、なしとんの下駄屋の大将が見て、

「^㉓桐の下駄二つー、ええの履いてもうてえ、早うお金はるとくなはれやー」言うて、

ほつと上見やつたら桐の下駄履いて飛んどるさかいに、

「^㉔早よ、はるとくなはれや、お金高いのにー」て言やつたら、

なにもかもしょうぞくがそろうたので、おいせさんにまいました。(鏡どころ)と書いてあるのを、「カカミドコロ」と読んで「コロオモシロイ。」^⑮ハイロヤナイカ」といって入つて一寸行くと(琴シヤミセン)と書いてありました。二人は「コトシヤ見セン」と読んで

「^⑯今年しや見せよらひんねと」といってもどつてくると「^⑰イタチイタチ」とよんでいるので見に行くど板に赤い色粉を流してあつただけでした。

いかあいうことで、ヒチコとハイコが、やつとのことでお伊勢はん着つこつてんで。ほいたら、お伊勢はんの道すがら、いろいろの店屋が出てやんねて。

「^⑱いたちい、いたちい」て言うちやあてんで。

「へえーイタチ売つてあのか、イタチの皮いうたらええらしい。イタチイ買おかあ」言うて二人見に行つこつたら、板に赤あい血いみたいな赤あい粉お流して、ほて

「^⑲いたち、いたちい」

ちゆうて見せちゃんねて。「ああ、あんなんやな」言うて、もうちよつと行つこつたら「かかみどころ」て書いたつてんで。

「へえー、どんななかか見せよんねやろ、^⑳ちよつと入つて見よやないか」

言うて、幕あけてちよつと向い行つこつたら、「ことしやみせん」て書いたつてんで、「あつ「ことしやみせん」と書いたるわ。^㉑もう今年は見せよらんらしい、こらあかん」

言うて出てきて、ほてもうちよつと行たら、天狗のうちわ売つとつてんで。ほんで

「あれ一つ土産に買つて帰ろか」言うて、その天狗のうちわ、二人が一本大

「^㉒後は尻くらひ観音や」言うて。

【中略】次に帽子屋へ行くところから、伊勢参りをして、あちこちの店屋に寄り天狗の団扇を買うところまで、五十六歳時の話と同じ展開だが、表現が詳しく長い。】

「^㉓ああ、あんなとこ人飛んでやるぞー。人間でも飛べんねぞー」言うて、「去のやないか」て言うて二人が飛んどのを連子の窓からきれいな娘はんが、大つきな家の娘はんが、「あんなとこ飛んでやる、飛んでやる」言うて見ちゃつたんやと。ほんだ、^㉔この団扇ちよつと試してみよんか。あの娘はんのこと、いっぺんどうしやうどー」言うたら、

大きなてんぐのうちわを買って帰りまし
た。途中でよその娘さんがレンジの窓から
二人を見つけて

「²⁰ヤアあんなとこ、人が飛んでやるー」
と大きな声でどやいだので

「あんなとこに娘さんがのぞいとる。²¹コ
ノウチワひとつめしたろ」
といって

「²²あの娘はんの鼻、高うなれ、鼻たこ
なれ」
とうちわであうちました。

すると娘さんの鼻がずんずん高こうなっ
てレンジから外へとびだしてしまいました。
どうすることもできないので、娘さんは泣
くし、家の人たちも心配してやいやいっ
ていました。そして空へむかって

「モシモシ²³どうか²⁴たすけてやっとな
はれ。²⁵なんぼでもお礼しまつさかいたの
むまつさー」
といってどやぎました。

「²⁶娘サンノカドヘトヘチャラカチャン
のオドルイノルイ」

といって二人はお礼たちました。そして
「²⁶娘サンノ鼻ヒクナレ、娘サンノ鼻ヒ

きな買うて、ほいて、たあーとまた空飛ん
で帰ってきよつてんて。ほいたら下から見
てやった、田舎の娘はんが、連子から空見て、
「²⁰あやーあんなとこへ人飛んで行きやる
わあー、あんな面白いのみい、空人飛ん
でやるわあ」

て言うて、えろ娘はんが見てやったらしい。
そんで

「あ、あんなとこで娘はん、えろ上見とる
わ。²¹ちよつとこのうちわ試してみよか」
て言うて、二人が

「²²あの娘はんの鼻高なれ、あの娘はんの
鼻高なれ」
てうちわであうちよつてんて。ほた娘はん

の鼻がずんずん高なつて、連子か
ら外へとんで出て、天狗の鼻より高なつて
んで。さあえらいこつちや、娘はん、もう、
あんあんあん泣きやるし、家の人とな
で来てみたら鼻が高なつて、天狗の鼻より
まだ高なつた、「難儀やあ」言うて、みんな
やいそれ言うて、ほて娘はんの話聞いて、
「どうぞどうぞ、空飛んではるお客さん、
この鼻直しとくなはれ。直しとくなはつた
ら、²⁴たんまりとお礼しまつしよつてん」
ちゆうて、家の親ももう一生懸命に拝むよ

「²²あの娘はんの鼻高なれ、娘はんの鼻高
なれ」て、ヒチコが団扇を上下にしよつた
んやと。ほんだら、ちよつとずつちよつと
ずつ、高なつたんや。またハチコも、同つしよ
に

「²³娘はんの鼻高なれ、娘はんの鼻高なれ」
てしよつたら、またとつとことつとこ天狗
みたいに鼻、連子から高なつてもたんや
と。ほんだら娘はんが、

「やー、知らん間ーにこんななつたー」
言うて泣いちゃあんねて。家の人もヤイヤ
イヤイヤ言うて、

【中略】

「あの空飛んでる人らがどないやら
しゃつた、どないやらしゃつた」て娘はん
が言やつたで、

「²³どうぞ助けておくんはなはれ、助けて
もーたらな、²⁴お礼たーんとさしてもらい
まつしよつてんな、²⁵助けておくんはなはれ」
て言うて、あの、頼みやつたらしい、みん
なよつて。ほんだら、

「あー、ええこつちやな、やつぱこの辺
で助けたらなあかんわ」言うて、

「²⁵娘はんの門へと、ほちゃらかちゃんの
おどるいのるい」て降つりよつたんやて。

クナレ」

と、いつてあうちましたら、だんだんひくく
なつて鼻はもとどおりになりました。娘さ
んも、家の人たちも大変よろこんで、ごち
そうしたりお礼のお金をたくさんだしまし
た。

うに頼まってんで。ほんで、あんまりかわ
いそうやさかい、また

「²⁶娘はんの鼻低なれ、娘はんの鼻低なれ」
て言うて、あうちよつてんで。へたらず
んずんずん鼻低なつて、また元の鼻に
なつてんで。ほんで、

「²⁵娘はんの門へと、ほちやらかちゃん
おどるいのるい」

ちゆうて降りて、ほて、たんまりとお礼も
ろて帰つてきよつてんど。

「どうぞすんませんな、こんな、あんなに
なつてしても、お嫁にも行かれへんし大変
やから、お金はちゃんと払います」ちゆうて、
「ほんだらー、あー、そうやな、難し
いけど、まあやつてみよか」言うて、二人
が一生懸命に

「²⁶娘はんの鼻低なれ、娘はんの鼻低なれ」
て両方からあぶちよつたんやて。ほんなら、
ゴットゴットゴットとだんだん鼻低なつて、
娘はんの鼻が元通りになつたんやて。ほん
だら、そこの親は喜んで喜んで、たんとお金、
札持つて来やつたんやて。ほんで、

「あー良かつたな、良かつたな」て
言うて、「¹⁵一、二、三」でボンと飛んで

「¹⁴後は尻くらい観音や」ちゆうて帰つて
きよつてんど。

このように三段で示した語りのそれぞれを対照しながらよく
見ていくと、イエの話の会話表現と智恵子の話の会話表現が
かなり似通っていることがわかる。

例えば、イエの傍線①「一ぺん伊勢まいりしようやないか」
は智恵子の五十六歳時・傍線①「一ぺん伊勢参りしようやん
か」、同七十九歳時・傍線①「いっぺん伊勢参りしーたいなあ」
に対応するが、同様に、智恵子の話の会話部分でイエの話の会

話の言葉とよく似ているものに傍線を付し、三段に共通の番号
を記してみた。すると、その傍線部分は二十六カ所となり、中
でも*印を付けた②⑨⑩⑮⑲⑲⑲⑲の七カ所の会話表現は細部ま
ではほぼ同じであることがわかった。この七カ所は音楽的なリス
ムのあるところであり、いわば「決まり文句」と言える。智恵
子はこの部分についてはいつ語っても同じ抑揚をつけてほとん
ど同じ言葉で語るが、イエも同じように語っていたのを記憶し

ている。

さて、傍線部の会話表現に関して今ひとつ重要なのは、これらの会話はいずれもこの話のストーリーにとって大切な事柄を述べているということであろう。まず、先に記した傍線①は主人公たちの一連の行動の出発点であり、次いで傍線②「ゴフク屋ノカドヘト、ヘチャラカチャンノオドルイノルイ」や類似表現の傍線⑩⑮は、空を飛べるというヒチコとハチコの超現実的なイメージを強く印象づけるものである。

また、傍線③④「一番上等の着物と羽織とじゅばんにばつち、はぶたえのへこおびからたびまで、二通りそろえてだしとくなはれ」や傍線⑤⑥「シヨンペンしとなりましたがな、はばかりおしえておくんははれ」は、彼らが呉服屋をだまして上等の着物一式を手に入れる企みを実行に移すための言葉となる。そして、後の傍線⑫⑬にあるように下駄屋や帽子屋の時もほぼ同じ会話が繰り返され、同じ行動をとるわけである。傍線⑨「アトハシリクライカンノンヤ」は、代金を請求して大声を張り上げる呉服屋（傍線⑦⑧）を尻目に悠々と空を飛ぶ二人の無責任な明るさが感じ取れるところだ。この言葉も後二回繰り返される。終盤、二人が空を飛んでいくのを見て「ヤアあんなとこ、人が飛んでやるー」（傍線⑳）と大声を出す娘に向かって、「コノウチワひとつためしたろ」（傍線㉑）と「あの娘はんの鼻、高うなれ、鼻たこなれ」（傍線㉒）と言いながら団扇をあおぐところも、最後の理不尽な大儲けという結末につながる、欠くこ

とのできない会話と言えよう。

こうして一つ一つ確認してみると、傍線部の会話表現は、この話の現実離れた奇想天外なストーリーと、ヒチコとハチコのトリックスター的な性格を語るのに、必要欠くべからざるものと言つてよいだろう。そして、柔らかくかつテンポの良い関西弁の会話とリズム感あふれる繰り返しのフレーズも相まって、聞き手を実に痛快で楽しい語りの世界に導いてくれるのである。

会話表現は昔話の記憶の核

さて再度、イエと智恵子の二回の語りを、傍線を付した会話表現に注目して見直してみよう。イエの話では会話を示す「」が二九カ所あるが、その内二五カ所に傍線を付したことになる、それはつまり、智恵子の話にはイエの話に見られた会話の八六パーセントが受け継がれていることを意味している。しかも、智恵子の話はイエの話に比べて長く、特に七十九歳時の語りはイエの二倍以上あるが、この時も智恵子はイエの話に見られた会話表現をほとんど削らず、他の会話を付け加えるか細部を膨らますことで長くしている。

それは、先に確認したように、イエの会の会話表現のほとんどがこの話のストーリーにとって重要なものであれば、当然のことかも知れない。しかし、智恵子がイエから話を聞いたのは

十歳頃までのことだという。つまり智恵子の二回の語りは話を聞いてから四十数年後、および約七十年後のものであるということだ。それを考慮に入れば、イエの話の会話部分がいかに強い印象を伴って智恵子の話に受け継がれているか、驚くほどなのである。

以前私は、やはりイエの話と智恵子の話を比較対照して、語り手が子ども時代に聞いた昔話をどのように記憶して伝承しているかということについて考察した⁽¹³⁾。そして、語り手は自らが聞いた語りを声として記憶しており、その話を語る度に「声としてのことば」の記憶を核として次々とストーリーを思い出し、思い出しながら自分の語りを再創造しているのではないかと推察した。

今回は会話表現に限ってイエの話と智恵子がどのように受け継いだかを見てきたのだが、やはり智恵子はイエの話の会話表現を「声のことば」として記憶しているのではないだろうか。この話では、会話部分に繰り返しや決まり文句、一定のリズムのある言葉などもふんだんに盛り込まれ、より声として記憶しやすいであろう。すると智恵子は、語る度に「声のことば」として記憶した会話表現を核として話全体のイメージと話の流れを蘇らせ、さらに場面場面に關する自分のイメージを膨らませて様々な表現を付け加え語っていると考えられる。だからこそ、語る時期の間隔が開いても、またイエの話に比べて随分詳しく長くなくても、イエの話の会話表現をほとんど削らずに語るこ

とができるのである。

先に、私は、語り手は会話部分で語りの表現力（声による表現力）を發揮し、聞き手は会話表現（日常耳にする声のことば）によって登場人物の具体的イメージを抱くことができると述べた。そのこととイエから智恵子に伝承された「ヒチコとハチコの伊勢参り」を考えあわせてみると、イエの語った話の会話表現は、かつて聞き手であった智恵子に具体的なイメージを伴って確実に受け継がれ、さらに豊かなイメージを表現する語りの核となって再現されると言えよう。

まとめにかえて

かつて昔話について学び始めた頃、筆者は、昔話はその内部に持っている伝承の力は、主にそれぞれの話型（ストーリー）の持つ魅力にあると考えていた。いわゆる「モチーフの整った話が良い語り」という見方とも言える。

しかしやがて、語り手が昔話を好んで聞き記憶し語ってきたのは話型（ストーリー）に対する興味からだけではなく、口頭伝承ならではの……の、一回一回の声による表現の魅力が伴わなければ、その話が語り継がれることはなかったであろうと考えられるようになった。なぜなら筆者は、昔話を声でのみ記憶し語ることができた祖母と、その祖母から受け継いだ話を八十年以上も覚えていて語れる母を持ち、祖母や母がなぜ昔話を記憶し語

ることができるのか、不思議に思うとともに、その理由を考え続けてきたからである。

もともと「声のこぼ」の表現作品である昔話は、祖母や母のように名も知れない無数の人々によって連綿と語り継がれてきたものである。その一人一人の一回一回の語りの中に、毎回ほぼ変わらず語られ伝えられる部分と、一方その時その時語り手によって変更され、また新たな表現が加えられるところがある。そして、「変わらない部分」が話のイメージの記憶の核となつて「新しい表現」を支え、相互の影響の中で語りが引き継がれてきたのだと考えたい。それは、「声による語りの伝承と創造」の姿ではないだろうかとも思う。

今回は、「ヒチコとハチコの伊勢参り」について祖母と母の語りを比較した際、あまりに会話の言葉が似ていることに気づいたのをきっかけとして、「会話表現」という観点から考察を進めてみた。そして、今まであまり注目されることのなかった会話表現がその「変わらない部分」であり、話全体の具体的イメージを支える柱としての働きと、伝承の際の記憶の核としての働きを担っていると考えたのである。

昔話を記憶し語るといふこと、その声による表現行為の不思議な魅力に、これからも惹き付けられ続けるに違いない。

【注】

(1) 本稿は、第三十五回日本口承文芸学会大会の口頭発表を

基に執筆したのだが、その発表の際、川田順造氏より、「会話部分」または「会話表現」を「一人称の発話」と言い表すことができるという貴重なご教示をいただいた。確かに、「会話部分」や「会話表現」という言い方は、本稿では「独り言」や「心の声」まで含めて考察していることもあり、どうしても曖昧な面が否めない。ただ、筆者の未熟さゆえ現在のところはそのまま論を進めることとし、今後の課題とさせていただきます。

(2) 田中整一氏は、『口承文芸の表現研究』(二〇〇五年 和泉書院)の序章で「自然の状況や社会状況あるいは心理状況についての描写や説明は民話にとって必須のものではない。(中略)心理についても自分が理解可能なレベルで想像しておいてよいのである。」と述べている。

(3) 稲田浩二・福田晃編『大山北鹿の昔話』(一九七〇年 三弥井書店)による。また、音声資料は稲田浩二監修『現地録音 日本の昔話』(二〇〇〇年 バンダイ・ミュージックエンタテインメント)により確認した。

(4) 小澤俊夫・荒木田隆子・遠藤篤編『鈴木サツ全昔話集』(一九九三年 鈴木サツ全昔話集刊行会)による。音声資料は、小澤俊夫著『昔話の語法』(一九九九年 福音館書店)添付のCDで確認した。また、小澤俊夫氏は同著でサツさんの「お月お星」について詳しい分析と解説をしている。

(5) 黄地百合子・大森益雄・堀内洋子・松本孝三・森田宗男・山田志津子編『南加賀の昔話』(一九七九年 三弥井書店)による。音声資料は筆者蔵。

(6) 注(5)に同じ。

(7) 当然、伝承の語り手の場合は、「地」の部分もほとんど方言で語られるが、注(2)に引用した田中氏の言葉にもあるように、「地」の部分でも具体的なイメージは聞き手の想像にまかされているといつて良い。また、文字言語に比べ音声言語の方が具体的なイメージを作ることに密接な関係があるとされ、そのことは、月本洋著『日本人の脳に主語はいらない』(二〇〇八年 講談社)および月本洋・上原泉著『想像』(二〇〇三年 ナカニシヤ出版)の「第I部 想像と言語―身体運動意味論―」等に詳しく述べられている。

(8) 参考にした音声資料は注(3)の(6)に記した。

(9) 明治三二年奈良県の斑鳩町生まれ。同県北葛城郡広陵町に住んだ。昭和四十年没。

(10) 大正九年奈良県北葛城郡広陵町に生まれ、現在九一歳。奈良県桜井市在住。約三〇話(伝説・世間話を含む)を語ることができる。

(11) イエの昔話の内十七話が掲載された。採録・報告は松本俊吉(智恵子の夫)。

(12) 対照する際に基準としたのは、中段の五十六歳時の語り

である。上段のイエの話は展開が一致するよう中段に合わせたので、空白の行があっても全く省略していない。

(13) 黄地百合子「奈良県の語り手、松本イエ・智恵子の昔話―「声の記憶」について考える」(『昔話―研究と資料―三八号』二〇一〇年)

(14) 黄地百合子「記憶としての昔話」(『日本の継子話の深層』二〇〇五年 三弥井書店)、および、注(13)に前掲の拙論は、祖母から母への昔話伝承に関する考えをまとめたものである。

(15) この「変わらない部分」と「新しい表現」は、柳田國男が提示した「保存部分」と「自由部分」(『昔話覚書』(『定本柳田國男集 第六卷』一九六八年 筑摩書房)より)というカテゴリーに含まれると言える。また、論のまとめにあたり、川田順三氏の「発話における反復と変差―「かたり」の生理学のための覚え書き」(『口頭伝承論上』二〇〇一年 平凡社)から、多くの示唆を与えていた。川田氏は、その中で「語りのことばづかいのレベルにおける多彩、多様な即興表現は、「かたる」という行為が元来孕んでいる二面性を如実に示している。すでにあるものを「かたどり」ながら、そこに絶対にも新しいものを付け加えてゆく―(中略)反復と、その中における変差、あるいは創造の探求は、小論の冒頭にも述べたような意味での、言語行為の成立自体がもつ二面性でもあ

る。」と述べている。

(16) 最初に紹介した山下寿子さんの「馬方と山ん婆」の二回の語りが『大山北鹿の昔話』（注3に前掲）の解説欄に掲載され、会話部分が似ていることが指摘されている。つまり、一人の語り手が同じ話柄の話を、時間を置いて語った場合（山下さんは5ヶ月後に二回目）会話表現はあまり変化しないということであり、智恵子の語りと同じく揺れが少ない例と言える。

(17) 近藤雅尚氏は「昔話とその管理者―小林トシー―」（野村純一編『昔話の語り手』（一九八三年 法政大学出版局）所収）において、「トシ嫗の語りの豊かさは、話の中の、会話、歌文句、擬態語擬声語などのリズムに支えられている。そして、そのリズムは、会話を例にとつてもわかる通り、違った昔話の中にあっても、場面が共通していることよって一定したものになってくる」と述べ、トシさんの語りの具体例を挙げている。そして、違う話でも「この場面における基本的な会話のやりとりは、ほぼ同じ語り口で語られている」との指摘の後、「いわば語り手固有のリズムであり、多くの話を管理する上で大変都合のよいこと」と述べている。この小林トシさんの例も、会話表現が一種の記憶の核となっているものと言えよう。また、従来から、「うた」の部分や決まり文句、反復表現などは語る度に揺れがほとんどなく、語り手が話を思い

出す鍵の役割を果たすとされてきた。それら揺れない箇所は会話表現に含まれることがよくあることにも注目していきたい。

【注に記したものの以外の参考文献】

田中瑩一「民話の構造と表現」（田中瑩一編『表現学大系 第二三巻 民話の表現』一九八八年 教育出版センター）

野家啓一著『物語の哲学』（二〇〇五年 岩波書店）

マックス・リュートイ著、野村法訳『昔話の解釈』（一九九七年 筑摩書房）

ウオルター・J・オング著、桜井直文他訳『声の文化と文字の文化』（一九九一年 藤原書店）

マルコ・イアコポーニ著、塩原通緒訳『ミラーニューロンの発見』（二〇〇九年 早川書房）

（おうち・ゆりこ）